

## イメージョンシー

大津 隆文

今から五十年ほど前、ニューヨークに駐在勤務したことがあった。不慣れな環境で苦労もあつたが、夏休みに家族で一週間程度のドライブ旅行が出来たのは楽しかつた(時にはほろ苦い)思い出だ。

あれはナイヤガラ方面に向かつっていた時だつたか、走行中に息子が「おしつこがしたい」と言い出した。やつと休憩所に辿り着きトイレに駆け込んだが、予想外に長い列、息子は足踏みしたり身を捩つたりしていたが、「もう少しだから我慢して」と言つてゐる間に、とうとう漏らし始めてしまつた。トイレの片隅に行つて後始末をしていると、近付いてきたアメリカ人が「いついう時は emergency と呼ぶといいよ、きっと譲つてくれるよ」と教えてくれた。emergency というのはもつと深刻、重大な事態を言うのかと思っていたが、意外に身近でも使うのだと知つた。

後日駐在員仲間の知人からは「自分は車の中に小さなバケツを置いているよ」との助言を貰つたりもした。

幸いその後はイメージョンシーに直面することはなく言葉も忘れかけていたが、最近になつて我が身の直接的な問題として復活した。

まずは数年前高尾山によく通つていた頃だ。麓のトイレで用を足して歩き始め大体二時間位で別なトイレに辿り着くのだが、「コース」によつてはトイレのないこともある。我慢する力が衰えたためかイメージョンシーとなる。大自然の中での立ち小便是本当に爽快だが、昔と違い今や罪悪感を伴う世の中だ。前後の人影が気になつて全く落ち着かない。

やむなく泌尿器科へ行つたら「ベオーバ」という薬を出してくれた。何でも膀胱を膨らませてくれるらしい。早速使つてみたが、気休めにはなつたものの期待したほどの神通力はなかつた。

その後高尾山は縁遠くなつたが、近頃は外でも家でも油断するといマージョンシーに陥る情けない老体になつた。再度泌尿器科へ行くと処方してくれたのが同じ薬。薬局へ行くと顔なじみの薬剤師さんが「あら、また高尾山に行かれるのですね」と明るく声を掛けてくれた。